

優秀賞 「一緒に食べることのすばらしさ」

松本 有美子

私の母は、父が十九年前に他界してからは、大阪で独り暮らしをしています。私と妹は二人とも嫁いでいるため、それは仕方のないことと、本人も諦めています。しかし、年齢が八十歳を過ぎた頃から（現在八十三歳）身体のあちこちに不具合が出て、それとともに精神的にも随分弱ってきました。

「何を食べてもおいしくない。」それが母の口癖になり、この夏はついに煮物すら自分で作らなくなってしまったのです。確かに独り暮らしの場合は、料理を作っても食べてくれる相手もなく、自分独りなら、近くのスーパーのお総菜を一パックほど買えば手間もかかりません。以前には「大根やかぼちゃの煮物を作っても、三日間それを食べることになる。」とよく言っていました。

お正月とお盆は、私の家族と妹の家族が集まり、賑やかに食事をする機会があります。それ以外にも、最近の気弱な母を気遣って、私であったり妹であったり、そして都合がつけばそれぞれの娘達（孫）も母の家を訪ね、一緒に食事をするように心がけています。そんな時の母は見違えるほど元気になり、「おいしい、おいしい。一緒に食べるとおいしいわあ。」と嬉しそうに、ほとんど残すことなく完食してしまいます。その様子を見るにつけ、一緒に食事することの大切さを痛感するのです。

私自身の子供の頃を振り返ると、昭和の時代だったこともあり、夕飯は必ず家族揃ってというのが当たり前でした。しかし、結婚して夫婦二人で暮らすことになると、主人が夜勤の日は私だけの夕食となり、確かにいい加減な食材でいい加減な食事をとっていたものです。その生活が五年を経て、現在の家で主人の両親と妹と同居するようになり、子供二人も加わって、総勢七人の家族となりました。今は義父も義母も他界してしまいましたが、三世代一緒にの食事は、その時は大変でしたが、今思い出せばとても楽しい時間でした。特に料理上手な義母には、食事を作る面では随分お世話になりました。その季節ならではの素材を大切に、「おふくろの味」のおばんざいはもちろんのこと、子供達の好物のハンバーグにいたるまで、幅広いレパートリーには感服します。

現在、娘一人が嫁ぎ、四人家族になりましたが、台所仕事を担う私は義母に一步でも近づけるよう、遅咲きながら日々の食事に気を付けたいと思います。そして、できるだけ独食になることを避け、一日一回は一緒に食事ができるよう努力したいと思います。